



今年の夏は暑かった。水分摂取量の不足によって、熱中症や脳梗塞を引き起こすことも多かったようだ。特にお年寄りには厳しい夏となった。自然災害も多く発生し、自然の脅威と、人為の無力感を改めて実感した夏でもあった。

近年、異常気象という言葉をよく耳にするようになったが、自然は自然の摂理のままに変容する姿を現すだけで、実は何の不思議もない、ごく自然な事象なのだ。人間の都合だけが優先される地球上での人間の横暴さは止まるところを知らないが、立場を変えてみれば、むしろ人間の方が異常なのかも知れない。原子力も、科学技術の粋を集めた宇宙開発も、人類の、地球の、宇宙全体の、幸せにつながるとはとても思えないのだ。人間は自然の前にもっと謙虚にならなければと思われた、今年の夏であった。

秋季永代経

9月23日(月) 午前・午後
 秋分の日

お斎あります

法話 午前 G・N
 午後 住 職

必要なものを楽しく循環させよう

生ごみは「生ごみ減量」

Y O

毎日の暮らしから出てしまう生ごみ。四大家族だと一日平均五〇〇〜八〇〇グラムとか。収集日まで置いておくと臭うし、ごみ出だてで面倒な嫌われモノである。ところがこの生ごみを「貴重なお宝」と見るのが、福岡市の「法人循環生活研究所」で理事長を務める、Hさん。生ごみを肥料に変える「ダンボールコンポスト」を普及させる活動をしているのだ。

「コンポスト」とはもともと「堆肥化」という意味。スペースが必要なプラスチック製コンポストなどに比べ、ダンボール製はマンションのベランダでもOK。手軽だし、ごみ減量になるし、何より楽しいですよ。

ダンボール箱に「コナチップ」ヤシ殻を一定期間淡水の中に浸しておいた後、粉碎したものと燻炭もみ殻を炭にしたものを入れ、毎日生ごみを入れて混ぜていけば、分解菌が発生してごみを食べてくれる。気になる臭いだが、驚くほど少ないのが特徴とか。そしてだんだん、栄養豊かな「肥」に変化していくのだ。

大垣市は六年前から、大垣市環境市民会議活動の一環として、循環生活研究所の指導の下、「ダンボールコンポスト」の普及に取り組んできた。

六年前に大垣市の広報で参加者募集の記事を見つけ、さっそく応募した。それ以来、毎晩夕食後に1日分の生ごみを「ダンボールコンポスト」に投入している。四か月から五ヶ月分は楽々入る。これだけ入れてもカサが増えていかないのが不思議だ。

今回、循環生活研究所が開催したアドバイザー養成講座 福岡市…2泊3日を受講した。

正しい使い方を指導するためには、この講座を受講し、さらにはこの回の実講習を経てアドバイザーとして認定してもらわねばならない。正しい使い方をしないと、臭いが出たり、虫が発生したりして、途中でやめてしまう人が出る。長く続けたいので、正しく指導したくさんの人に「必要なものを楽しく循環させよう」「生ごみ堆肥化」「CO2削減」を減らして、おいしい野菜を作る。E生活を





入方
K・O様邸にて
8月28日撮影

日本の夏の風物詩に簾や、よしすがあ
るが最近よく見かけるのが、こうした感
じで、ネットに朝顔を這わせたりして涼
をとる生活の知恵である。

月命日を
終えての
帰り際に
ふと目を
やると、
黄色く色
づいたゴ



ーヤが飛び込んできた。良く見てみると
ごらんのように、はじめて種子が地面に
落ちんばかりであった。初めて目にする
光景で驚いたが、ゴーヤの生命力を強く
感じたことだ。奥様曰く、オクラも同じ
よつなことが起るんじう事じうこと。



右の写真の白いひ
げのようなものは
オクラがはじめて
乾燥したもの。立派
な生け花として成
立っています。セン
スが生きています。
(玄関)

お彼岸って？

「彼岸」という言葉は、私たちの生きている世界を「此の岸」というのに対して「彼の岸」を言います。「彼の岸」とは阿弥陀様のさとりの世界である浄土を意味します。「此岸」から「彼岸」へ。

「お彼岸」とは迷いの世界にいる私たちが、悩みや苦しみのない浄土に到ることを願う仏事であるのです。

私たちは亡き人を偲ぶことを通して、悩み苦しむ煩惱の身を生きている事実立ち返らされるのです。(避けられない生老病死の身を生きている事実心から願うこととす。)

浄土真宗においては、お寺やお墓にお参りすることは先祖供養ということではありません。亡き人からかけられた願いを、身をもって聞く場をいただくということとす。

永代経もお念仏の教えを永きにわたって子孫に伝えていくことが願われている大切な縁としてあるのです。

その間法の場合、寺院でありお内仏なのです。お彼岸を迎えるにあたり、今一度お彼岸に込められた願いを確かめていきたいこととす。

最近の住職としての日課の一つに、本堂の縁の雑巾がけをすることがある。

吹きさらしのこの縁は土埃と雨水の吹き込みで、ずいぶん汚れてきている。

せっかく新築で張り替えたのに、と心が痛み以来毎日の日課の一つとして雑巾がけを始めた。これでひと月あまり一ことがない。始め、艶もしみ込んだ。たわてみたら確は落ちるようだが、固い年輪の部分だけが浮き上がり、どうにもいただけない。



住職の日課

どうも性急なことには無理がかり、味気なさが残ると、今では雑巾ひとつでコツコツとやっている。

時々参詣者の人と縁に腰かけ談義する。何とものどかで、こんな時間を私は望んでいたのかもしれない。